

エンカウンター・グループ相互作用評定 スケールによる継時分析と実践への示唆

Analysis of Basic Encounter Group Process and suggestion for it's practice.

— by means of the Basic Encounter Group Interaction manner scale —

坂中 正義

Masayoshi SAKANAKA

(学校教育講座心理学研究室)

要 約

本研究の目的は、体験過程の視点からみたEGでの相互作用の特徴と各発言の影響を探索することである。そのため、坂中(1998)で作成した「エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケール(以下、EGIMS)」を用い、1グループの継時分析を行った。

結果はKJ法でカテゴリー化され、自己開示に対する傾聴やフィードバックの影響を中心に考察された。

さらにEGIMSを用いた一連の研究(坂中,1998 坂中,2000,本研究)結果から、臨床実践への示唆について、EGの可能性とファシリテーションの2点から論じられた。

キーワード: ベーシック・エンカウンター・グループ, 体験過程, 相互作用, 継時分析,
実践への示唆

I. 問題と目的

わが国にエンカウンター・グループ(以下、EG)が導入されて以来、多くのリサーチが行われてきた(村山・野島・安倍・岩井, 1979等)。最近の主なリサーチは、坂中・村山(1993)に紹介されているが、いくつかの研究では、EGの効果として、メンバーの体験過程の促進を挙げている。

例えば、村山・樋口(1987)は、メンバーの発言にKlein, Mathieu, Gendlin, Kiesler(1970)の体験過程スケールを適用し、グループ・プロセス、個人プロセス共に体験過程の促進を確認した。

また、坂中(1994)は、「エンカウンターグループ発言カゴテリー」を作成、事例に適用し、「グループ内での感情・感じの自己開示」や「今ここで」発言などの増加がみられることから、メンバーの体験過程の促進を示唆した。このカテゴリーを用いた大塚(1999)でも、ほぼ同様の結果を得ている。

しかし、これらの研究は、話し手としてのメンバーの体験過程の促進に言及しているだけで、どのような要因でそれがなされるのかといった検討はされていない。

個人療法の研究では、クライアントの体験過程の促進をカウンセラーとの相互作用から明らかにしようとする試みがある。例えば、吉良・田村・岩重・大石・村山(1992)は、ロジャースのグロリアとの面接を、クライアント用体験過程スケールとセラピスト用体験過程スケールを用いて相互作用の分析を行っている。

EGでも、メンバー間(ファシリテーターも含む)の相互作用の中で体験過程の促進がなされるであろう。このことを明らかにするためには、話し手の体験過程の促進だけでなく、聴き手としてのメンバーの話し手との関わり方にも焦点を当てる必要がある。

そこで筆者は、坂中(1998)において、体験過程の視点からみたEGでの相互作用を分析するため、「エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケール(以下、EGIMS)」を作成し、基礎的なプロセス分析を行った。その結果、メンバーは、セッション進行に伴い、自分の体験過程と同様に他者の体験過程も重視し、お互いの体験過程を尊重した態度に変わってくることを示した。

さらに坂中(2000)では、EGIMSをもちいて、相互作用とEGの効果との関連を検討した。その結果、「グループが十分に展開するには、グループが基本的に、

受容的で親密で自由な雰囲気を保っているか、その上で、活発に発言がなされ、お互いの体験過程を尊重し、促進することが重要である」「メンバーが心理的に成長するには、グループ内で何らかの気づきや開けを体験するとともに、セッション内で、積極的に他者に関わりながら、他者理解の仕方や共感性を養うことが重要である」などが示唆され、相互作用と効果は密接な関係にあることを示した。

本研究では、具体的なEGでの相互作用の特徴、ならびにメンバーの自己開示に軸をおき、他の発言がそれにどう影響して、体験過程レベルの上昇がみられるのかを探索することを目的とする。そのためEGIMSをもちいて、あるグループ事例における相互作用の継続分析を行う。

また、EGIMSをもちいた一連の研究（坂中,1998, 2000,本研究）の締めくくりとして、それらの結果から、EGの臨床実践へフィードバックできることを考察する。

II. 方法

対象

パーソン・センタードの立場にたつ私立のカウンセリング研究所主催、3泊4日の日程で行われたベシク・エンカウンター・グループ。平均2.6時間のセッションを10回、計26時間行われた。形態は通い方式（内2名宿泊）で、「文化的孤島」環境ではなく、日常性と密着した環境で行われた。メンバー構成をTable 1に示した。男性2名、女性8名、計11名、年齢は20代から40代で、職業は教師、看護婦、会社員、主婦、大学生など多岐にわたった（著者はメンバーとして参加している）。ファシリテーター（以下、fac.）は男性1名だった。このグループは、村山・野島(1977)のEG発展段階仮説・段階Ⅵまで展開しており、十分に展開したグループと判断された。

Table 1 グループ構成

参加者	性別	年齢	職業
fac	男	50後	カウンセラー
A	女	30前	
B	女	40前	主婦 2
C	女	40前	大学生 2
D	女	40後	教師 1
E	女	40後	看護婦 1
F	女	20後	福祉職 1
G	男	20前	保健婦 1
H	男	40前	会社員 1
I	女	20前	公務員 1
J	女	20後	

注）fac…ファシリテーターの略

記録

対象となったEGのセッションをテープに録音した（ただしメンバーがテープ録音を拒否した場合は録音を中止したため、実際に録音されたのは、セッション4（以下、#4）の途中から#5、#7から#10で、録音率は54%となった）。さらにテープから逐語記録を作成した。

スケール

対象グループを坂中（1998）のEGIMSを用いて分析した。これは体験過程の視点からEGでの相互作用を分析するためのスケールである。ディスクロージャー・スケール（以下、D-scale）、リスニング・スケール（以下、L-scale）、フィードバック・スケール（以下、F-scale）の3つの下位尺度からなり、それぞれ7段階、7段階、5段階で評定する（各スケールの概要はTable 2を参照）。発言は、どの下位スケールを適用するか選択することで相互作用の種類について、各スケールにおける段階を評定することで発言様式について、測定される。

Table 2 エンカウンター・グループ相互作用様式評定スケールの概要

下位スケール	内容
D-scale	話し手が自分をどんなふうに語るかという自己開示や自己探究、自己との出会いの様式を測定する。（クライアント用体験過程スケール）
L-scale	聴き手が話し手のどこに焦点をあてて話を聴いているかという話の聴き方の様式を測定する。（セラピスト用体験過程スケール）
F-scale	話し手やグループに対して、聴き手がどのような感想の持ち方をするかという他者への感じ方の様式を測定する。

Table 3 データの抜粋

発言 ID	fac.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	発	言
E 10						L 3							Jさんは、あの～ 今の話なんだけれど(うん J)、Gさんに詩人みたいって。「自分は、そういう事は感じたことがない」っていう感じで言われたんですか? 「自分もそういうのはあるけれども…」っていう感じ?
J 10											D 2		う～んとねえ、もしかしたらGさんくらの時には、あったかもしれない。けど今はもう忘れてしまったけれどっていう… (ああ D, E)う～ん なんかそんな気がしたんです。(ふ～ん D) だから今ね、Cさんから「あるはずだわ」って聞いた時に、きつと今ね、(う～ん D)もう忘れてきちゃって、あんまり今は、心に響くっていうのになって (てれ笑)。 … (7秒) …
C 10				F 2									だから体にきつと変化があるはず(う～ん J)。でもそれに何かこう～ 打ち消す力が強いのかなくて(う～ん J)。そんなことちょっと思ったりして。で、なんかその変化に気づくっていうか。変化を大切にされたら、もっと違っていくなかって。 … (18秒) …
fac2	F 2												「Gさんくらの時にはあったかも」って言われるとき、で、「今はなくなった」って言われると、私なんかもう全然 (笑)
J 11											D 2		いや、ただね、子供の時に受ける感動っていうのはね、だんだん年とともに薄れてきたなあって。
D 10					L 3								う～ん、やっぱり年とかとれば仕方ないのかなあって。
J 12											D 3		かなっていうような…半ば諦めに似たようなものを。

抜粋した発言は、実際になされた発言に若干の修正を加えている。D, L, Fはスケール名、数字はレベルを表す。矢印は発言の方向を示す。

Table 4 具体的な相互作用の特徴

- ・グループでの相互作用は、話し手の自己開示を中心に進んでゆき、聞き手は傾聴していくことで関わっていた。
- ・傾聴発言は、基本的に話し手の自己開示発言のレベルと同様のレベルでなされることが多かった。
- ・感想発言は、話し手と聞き手の相互作用(自己開示-傾聴)が一段落した後でなされていた。
- ・話し手の自己開示中に、傾聴しながら徐々に自分の自己開示を始めたり、感想を述べながら自分の自己開示を始めたりすると話が交錯し、他のメンバーやfac.が介入していた。
- ・話がごく一部のメンバーでなされたり、交錯したりするときには、メンバーやfac.がそういったことをフィードバックして、グループの方向性を修正していた。
- ・fac.の発言は、場面構成やグループの方向性についてのフィードバックの発言が多かった。

分析方法

録音されたテープの全ての発言を時系列に従い、メンバー毎にEGIMSを用いて評定し、シートに記入した。この際、発言が誰にむけられてなされたかという発言の方向性についても記入し、具体的な相互作用が明確になるようにした。

Ⅲ. 結果

対象グループの全発言を評定したところ、総発言単位は1848単位(# 4 : 207 # 5 : 292 # 7 : 487 # 8 : 403 # 9 : 345 # 10 : 114)だった。これらすべてにEGIMSが適用され、シートに記入された(抜粋をTable 3に掲載した)。このシートと逐語記録、テープを併用して、具体的な相互作用の特徴や各発言の他者への影響をカードに転記していった。それらのカードを川喜田(1967)のKJ法の要領で分類、整理した。その結果、相互作用の特徴についてはTable 4、発言の影響についてはTable 5を得た。

Ⅳ. 考察

結果から、EG 内での具体的な相互作用の特徴と発言の影響について検討してゆく。

相互作用の特徴

グループの相互作用は、話し手の自己開示を中心に

Table 5 発言の与える影響

・話し手の自己開示が行き詰まった時に、聞き手が感情の明確化をすると、気づきや開けが起きていた。 例) A: D4→B: L5→A: D6
・聞き手の明確化が多少ずれていても、話し手がそれを修正し、自己探究的な発言がなされていた。 例) A: D4→B: L5→A: D5
・聞き手が話し手の存在自体にフィードバックする時に、話し手の自己開示レベルが上昇していた。 例) A: D2→B: F4→C: F4→A: D3
・話し手の気づきを聞いたメンバーが、自分の体験を検討し、そのメンバーにも気づきが起きていた。 例) ……→A: D6→…B: D6
・話し手が自己探究している時は、相互作用に関わらず、自己開示レベルが上昇していた。 例) A: D4→…A: D5→…A: D6
・聞き手が話し手に感じたことのフィードバックをすると、話し手の自己開示に広がりが出てくる。 例) A: D4→B: F3→A: D4
・聞き手の話が話し手の話の内容と関係のないような自己中心的な質問は、話し手の自己探究のプロセスを妨げる。ただし、話し手の自己開示レベルが安定していると話し手自身がもとのレベルに戻る。 例) A: D3→B: L1→A: D1→B: L1→…A: D3
・聞き手が知的なフィードバックをしたり、アドバイス、意見を述べたりすると、話し手の自己探究のプロセスを妨げる。また、話し手に関係のない感想を述べても同様であった。 例) A: D5→B: F2→沈黙
・複数のメンバーの自己開示が続くときに知的なものが入ってくると、他のメンバーの自己開示も落ちてくる。 例) A: D3→B: D2→A: D2
・話し手の自己探究プロセスが進展しない時に聞き手の傾聴レベルが上昇する。 例) A: D4→…A: D4→B: L5
・話し手の自己開示レベルが上昇した時に、それに寄り添う形で聞き手の傾聴レベルも上昇する。 例) A: D4→B: L4→A: D6→B: L6
・話し手の自己探究プロセスにいくら関わっても、そのプロセスが進展しない時に聞き手の傾聴レベルが低下する。 例) A: D3→B: L4→A: D3→B: L3
・話し手に知的なアドバイスや意見を言ってもいっそうお互い分かり合えないといった経験をした時に、感想発言レベルが上昇していた。 例) A: D2→B: F2→A: D2→…B: F4→A: D4

記号の説明・A: D4 はじめのアルファベットはメンバー名、次はスケールの階級、数字はそのレベルを表す。D…ディスクロージャースケール、L…リスニングスケール、F…フィードバックスケール

進んでいた。聞き手は、話し手の自己開示発言のレベルと同様のレベルで傾聴し、話し手に寄り添う形で関わっていた。このことより、グループでの話の展開は、基本的に話し手自身に委ねられており、話し手中心にグループが展開していくことが分かる。

また、感想発言は、話し手を聞き手なりに理解し、話し手の自己開示が一段落付いてなされていた。これも、まず話し手の理解を優先し、グループが動いていることを示している。

以上のような相互作用を、話し手、聞き手が入れ代わりながら、積み重ね、グループが展開していった。

こういった相互作用により、話し手は自分の話したいことを、防衛的にならずに話せ、徐々に体験へ近づいてゆく。その結果、自己の体験の吟味や探究が出来るようになってくるのではなかろうか。聞き手にとっては、話し手に寄り添って傾聴していくことにより、話し手の内部照合枠から理解するという体験を持ち、他者理解の仕方を体験的に学習するのであろう。そういった理解が、聞き手に話し手との基本的出会いをもたらした、話し手にとっても、聞き手に理解され受容されたという体験をもたらすのであろう。

リスニングの影響

話し手の自己開示が行き詰まった時に、聞き手は話し手の自己開示レベルより高いレベルの傾聴をおこなっていた。こういった場合には、話し手の体験過程を促進し、気づきや開けをうながすことがあった。話し手の行き詰まりが無い時にも、話し手の自己開示レベルより高い応答がなされ、同様に話し手の体験過程の促進が起きることもあったが、これはえてして一時的な変化でしかなかった。このことは、ただ単に傾聴レベルの高い発言をすれば、話し手の体験過程の促進が起きるわけではなく、話し手の自己開示の進展によって影響も異なるということを示している。

こういった聞き手による明確化は、その応答が多少ずれていても、話し手と聞き手の間でそのずれが修正され、話し手は、聞き手のずれの修正をする過程で、自分の体験へより明確に目を向けるようになっていた。そういった体験へ目を向けることにより、気づきが起きるのであろう。聞き手にとっては、自分の理解した、感じ取ったところと、本人の言いたかったことの間を埋めてゆくことが、共感性を育てることになるのであろう。

また、聞き手が自己中心的に関わったり、話し手の発言をきっかけに自己開示を始めたりすると、話が交錯し、話し手の自己探究プロセスが阻害されていた。これは、発言時に聞き手に話し手の内部照合枠から理解してゆくという態度が欠落していることから起きているようである。話し手に知的なフィードバックをしたり、話の内容で議論したりという形で関わるメンバーにも同様のことがいえることであろう。これは話の内容に捕らわれ、話し手が何を言いたいのかよりも話の内容に対する自分の意見が先行していることから生まれる。

以上より、聞き手の話し手に寄り添うような傾聴発言は、無理のない自己開示が促されるということがいえよう。これは、そういった応答が必ず、話し手に気づきや開けをもたらすといった性質のものではないが、気づきや開けの必要条件とはいえるだろう。話し手が自由に話をしていくことが、話し手自身にとって重要で、話し手の自己開示の進展に関係なく、聞き手が促進的な応答をすることでその体験過程の促進は本人にとってあまり意味がなかったのではなかろうか。対象グループではみられなかったが、こういった応答は逆に話し手に心理的外傷を負わせ、体験過程レベルの低下をもたらすことも考えられる。吉良ら(1992)によれば、個人療法においてであるが、クライアントの体験過程レベルよりも高いレベルでセラピストが応答した場合に、クライアントに混乱をもたらすこともあると述べている。これはクライアント-セラピスト関係で、クライアントが「からだの感じ」がじかに体験できるようなリラックスした伸びやかな感じと定義されている「主体感覚」が育成されているかどうかによってい

ると著者らは主張している。

メンバーの感じていることや体験していることを尊重し、そこに寄り添っていくこと、こういった他者尊重的態度が、話し手にとってだけではなく、聞き手の他者理解の体験学習として共感性を養うことともなり、グループ全体にとっても大きく影響を及ぼすといえよう。

フィードバックの影響

感想発言は、上述のように話し手を聞き手のやりとりが一段落し、話し手の自己開示がまとまりがついた時点でなされていた。その時、話し手の存在自体へのフィードバックがなされると、そこから話し手の自己開示がはじまり、そのレベルは上昇していた。存在自体へのフィードバックでなくても、感じたことのフィードバックは、話し手が今まで開示していたことを違った角度から検討し、自己開示に広がりをもたらしていた。逆に、知的なフィードバックをしたり、アドバイス、意見、話し手には関係ない感想は、話し手の自己開示を阻害したり、自己開示レベルの低下をもたらしていた。

感じたことのフィードバック、特に存在自体へのフィードバックは、親密で受容的關係を形成する。こういった関係では、防衛的にならず、自己の体験へ触れることが可能となろう。また、相手からの見え方をフィードバックされることは、自分の感じを吟味することになり、一層の自己探索の契機となるであろう。ただし、対象グループではみられなかったが、存在へのネガティブなフィードバックがなされることもある。こういったフィードバックは、知的な攻撃とは異なり、防衛がきかず、直面化しなければならない。こういった体験をへて、気づきや開けが起き、聞き手のフィードバックがポジティブなものに変化し、両者の関係が一層深まると、成長につながるが、不完全に終わると話し手にとっては心理的外傷となり、両者の関係は不安定なものとなる。よって、感じたことや存在自体へのフィードバックはどのようなものでも話し手と親密で受容的關係を形成するわけではないとも考えられ、その内容にも大きく影響するといえよう。

逆に、知的なフィードバックは、防衛的態度を助長し、自由な自己開示を阻害すると考えられる。

以上より、感じたことや存在自体へのフィードバックは、話し手と聞き手の関係を親密で受容的なものとし、話し手の体験過程の促進の必要条件となるといえよう。しかし、内容によっては心理的外傷ともなりうるので、fac.は注意が必要である。

また、感想発言には、違った働きもあった。EGでは常にスムーズな相互作用が続くのではなく、複数のメンバーの自己開示が交錯したり、ごく一部のメンバーで話が展開しはじめたりすることも起きる。こういった時には、他のメンバーやfac.がその旨、フィー

ドバックして、グループの方向性を修正していた。

これはフィードバック発言は単に相手に感じたことを述べ、親密感や受容的關係を形成するだけではなく、グループの方向性を修正するという働きを持っていることを示している。坂中（2000）で、感想発言はグループの展開と密接な関係があることが示されたが、それは坂中（2000）で述べた考察のように、親密で自由な受容的關係が形成されるからだけではなく、もっとダイレクトにグループの方向性を修正していくという働きもあるからであろう。

今後の課題

本研究では、グループの具体的な相互作用や発言の影響を詳細に検討した。ただし、1グループの検討であり、他のグループについても詳細に検討してゆくことで、ここで記述した特徴を検証してゆかなければならないであろう。また、自己開示発言への影響は、いくつかの事実が明らかとなったが、他の傾聴発言や感想発言への影響は、あまり言及できなかった。これらの発言に影響を及ぼす発言についても検討されなければならないであろう。

こういった発言の変化への影響は、グループでは様々な要因が絡み合っているため、変化のプロセスを詳細に記述していく事例研究的な手法を用いて明らかにしてゆくことも有効であろう。

V. 実践への示唆

筆者は、坂中（1998）で相互作用の測定法を開発した。坂中（2000）でマクロの視点からグループ内での相互作用と効果との関連を検討した。本研究ではミクロの視点から実際の相互作用を分析した。この一連の研究を通して、体験過程の視点からみたEG内での相互作用を検討してきた。ここでは、明らかにした知見から、臨床実践にフィードバック出来ることを考察する。

EGの可能性

坂中（2000）のグループ・プロセスの分析から、EGの効果として体験過程の促進があげられた。自己の体験過程の促進は、問題と目的で述べたように、従来からいわれてきたことで、ここでは追試を実証的に行った。体験過程の促進は、体験過程理論からいえば人格変化の変数である。心理療法のオリエンテーションに関わらず、人格変化が起きる場合は、体験過程にふれて、その意味を象徴化している。これは坂中（2000）のメンバー成長度別のグループ・プロセスの分析でも示された通り、高成長者はグループ内で何らかの気づきを得ている。EGをよりセラピー・グループ的な方向へ発展させるならば、体験過程促進のためにfac.がより介入的に動くことも可能である。本研究では、体験過程促進の必要条件として、聞き手が話し手の感じ

ていることや体験していることを尊重し、そこに寄り添っていくような他者尊重的態度で接していくことや、感じたことや存在自体へのフィードバックすることで親密で受容的な関係が形成することが上げられた。fac.はこういった態度や関係をメンバーが持てるように、構成型グループのように課題を入れていくことも出来るし、導入時に枠付けをすることも出来る。そこまで介入しなくても、グループが展開しない時に、fac.がこれらをフィードバックするだけでも、グループ・プロセスに与える影響は大きいであろう。

また、EGでは他者の体験過程に焦点をあてることが出来るようになり、高成長者では、より一層、そういった傾向がみられた。具体的には、聞き手になった時に、あくまで話し手に寄り添う形で傾聴してゆき、話し手が行き詰まった時に、話し手の気持ちを明確化してゆくという形で関わるといった動きとしてみられた。この時の聞き手の明確化が多少ずれていても、話し手の内部照合枠からの理解を徹底していれば、その後の聞き手と話し手の相互作用の中で修正され、話し手は自己の体験過程が促進されていた。聞き手は、このプロセスを通して話し手に対する共感性を養っていた。また、具体的に関わっていなくても、話し手を理解しようと積極的に関心をもってそういった相互作用を観察していれば、共感性を養う事になるだろう。

ならば、他者への共感性が必要になるカウンセラーやセラピストの養成にもEGは役立つはずである。従来、人間関係が重視される職種では、共感性が強調されてきた。そのため、看護学校や教員研修としてEGが用いられてきた。また、自発参加のEGでも、教員や医療・福祉関係の参加者が多い。カウンセラーやセラピスト養成カリキュラムとして、EGをもっと積極的に用いられてもいいのではなかろうか。

以上のように、今後のEGの可能性として、本研究で明らかとなったEGの内在している特徴から1.セラピー・グループとしてグループ、2.セラピスト訓練としてのグループ が提案できるのではなかろうか。ファシリテーションについて

次に、ファシリテーションの留意点について考える。坂中（2000）のグループ展開度別のグループ・プロセスの分析から、十分に展開したグループでは自己開示レベルは中期に、傾聴レベルは中期と終期に、感想レベルは初期段階から差がみられた。これらのことから、感じたことや存在自体へのフィードバックは、話し手と聞き手の関係を親密で受容的なものとし、グループが展開するかどうかは、グループが基本的に、受容的で親密で自由な雰囲気を保っているか、その上で、活発に発言がなされ、お互いの体験過程を尊重し、促進できるかに関係しているのではないかと考察された。

また本研究から、感じたことのフィードバックは、話し手に今まで開示していたことを違った角度から検

討させ、自己開示に広がりをもたらしめていたことも示唆された。

さらにフィードバックによって、メンバーやfac.がグループの方向性をダイレクトに修正していくという働きも考えられた。

このように、感じたことや存在自体のフィードバックは、グループの展開やメンバーの成長に大きな影響を及ぼす。fac.はこのことに留意し、必要であれば介入することで、グループ・プロセスをよりよい方向へ変化させることは出来るのではなかろうか。具体的には前述したように「知的な議論の場ではないこと」や「相手に感じたことを伝えることの大切さ」を場面構成として、グループが行き詰まった時に伝えていくことや、「話を聴いてどう感じたか」「ここまでのグループの動きを振り返ってどうだったか」などをメンバーに働きかけていくことで、上述のような発言を促すことが考えられる。

ただし、存在自体のフィードバックのうちネガティブなものは、そのまま終わってしまうと話し手には心理的外傷を与え、今までよりも関係が疎遠になってしまうので、この場合はそのフィードバックが変化するまで、相互作用を持続させるよう留意しなければならないであろう。

また、坂中（2000）のメンバー成長度別の分析から、高成長者はグループ内で何らかの気づきや開けを体験するとともに、積極的に他者に関わっていく中で他者理解の仕方や共感性を養っているということが明らかとなった。fac.がメンバーの成長の事を考えるのから、単に自己開示を促進するだけでなく、相手に寄り添って話を聴いていくことも促進できるように介入する必要がある。具体的にはfac.自身が話し手に傾聴していくこと、あまりにも相手の話が聴けていないメンバーには、そのことの重要性をフィードバックすることなどが考えられる。

グループ・プロセスやメンバー成長度といった効果要因と発言の量的側面の関連性はほとんどないということも明確となった。これは、グループを促進していく時に、メンバーがたくさん発言しているか、そうでないかよりも、どういったことが発言されているのか、どのように発言されているのかといったことに注目していくことの重要性を示唆している。グループで何かを得ようと自分について多くを語るメンバーがいるが、たくさんしゃべることで自分の体験過程に触れにくくなっていくかもしれない。じっくり自分の体験を味わいながら発言したり、折角得た、いい体験を自分の中で温められるように、fac.は、その人の発言を少し抑えるような介入をするということも考えられる。

以上のようにグループが展開してゆく時のファシリテーションの留意点をみてきた。ただし、ここで述べたいことは、fac.は必ずこれに従って介入しなければ

ならないということではない。グループが十分に機能し展開すればするほど、fac.の介入は少なくなるであろう。fac.の代わりにメンバーが自発的にグループの方向を修正し、自他の態度も変化させてゆくだろう。しかし、グループが展開しない時にはfac.の介入が必要となってくる。そういった場合にここで述べたことが有効になってくるということである。

最後に、介入を有効に機能させるための場面構成について述べる。グループがうまくいっている、うまくいっていないに関わらず、上述してきた介入を有効に機能させるには、EG 開始時の場面構成が重要になってくるのではないか。「EG はまったく何をしても自由である」といった場面構成よりも、「自分や他人を、体験を通して感じたり、触れる中で、自己理解や他者理解を深めていくグループ」という場面構成の方が、グループ展開やメンバーの成長のことを考えると、有効と思われる。まったくの自由であるという場面構成では、fac.の介入は自己矛盾になる。

よって、上述したような「体験を通じて自己理解や他者理解を深めていくグループ」といった枠の重視をここで提案し、この枠の中でメンバーは自発的に動き、fac.も促進的に関わっていくことを強調したい。

文 献

- 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために—中央公論社
- 吉良安之・田村隆一・岩重七重・大石英史・村山正治 1992 体験過程レベルの変化に影響を及ぼすセラビストの応答—ロジャースのグロリアとの面接の分析から— 人間性心理学研究, 10(1), 77-90.
- Klein, M. H., Mathieu, P. L., Gendlin, E. T., & Kiesler, D. J. 1970 The Experiencing Scale: A Research and Training Manual. Volume I, the University of Wisconsin.
- 村山正治・樋口昌巳 1987 体験過程の促進からみたエンカウンター・グループ—体験過程スケールによるエンカウンター・グループ過程の分析— 人間性心理学研究, 5, 88-98.
- 村山正治・野島一彦 1977 エンカウンターグループ・プロセスの発展段階 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 21(2), 139-152.
- 村山正治・野島一彦・安部恒久・岩井 力 1979 日本における集中的グループ経験研究の展望 実験社会心理学研究, 18(2), 139-152.
- 大塚 純 1999 教員の人間関係能力の向上をめざした研修のあり方に関する研究—研修型エンカウンター・グループの有効性の検討— 鳴門教育大学大学院学校教育学研究科修士論文
- 坂中正義 1994 エンカウンター・グループ発言カテゴリーの作成とその検討 人間性心理学研究, 12(1), 46-61.
- 坂中正義 1998 体験過程の視点からみたエンカウンター・グループでの相互作用—その測定の試み— 人間性心理学研究, 16(2), 146-158.
- 坂中正義 2000 エンカウンター・グループ相互作用評価スケールを用いたプロセス研究—効果との関連から— 福岡教育大学紀要, 49, 第4分冊, 209-219.
- 坂中正義・村山正治 1993 日本におけるエンカウンター・グループ研究の展望 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 38(2), 143-153.
- 〈付記〉本研究は、著者が九州大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(1995)の一部を加筆、修正したものである。
- 修士論文作成にあたり、御指導頂いた九州大学教育学部(現東亜大学大学院総合学術研究科)村山正治教授に謝意を表します。さらに著者と一緒に過ごしてくださったEG参加者の皆さんとファシリテーターの先生にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。